

## 美術の窓(82)

## 美術雑誌『大和文華』第45号を読む

—特別展『角倉素庵』開催にあたって—

大和文華館館長 水田 徹

美術雑誌『大和文華』が創刊されたのは昭和26年、世の中がなお二次大戦後の混乱の最中にあり、しかも美術館の開館自体を9年も先取ってのことでした。後に初代館長となる矢代幸雄が、美術館設立を目指し作品収集に東奔西走する傍ら、来るべき開館後の館運営を欧米の美術館に伍して本格化するべく、収蔵品や展示品を調査し、その研究成果を分かり易く世に問うべく発刊したものです。

その第45号は、前年の昭和40年に大和文華館で催された特別展「光悦展」を特輯しています。この展覧会は開館五周年を記念し、折しも修理のため半世紀ぶりに里帰りしていたベルリン東亜美術館（現ベルリン国立美術館東洋館）所蔵の光悦筆金銀泥下絵新古今集色紙を中心に据え、関連作品も加えた、当時としては絢爛たる展覧会でありました。

特輯号の方も、歴史家の林屋辰三郎、書道史家の小松茂美、美術史家の山根有三という錚々たるメンバーが、それぞれ「光悦と素庵」、「光悦と光悦流の書」、「光悦色紙の下絵について」という論文を寄稿し、さらに当時大和文華館学芸員であった伊藤敏子氏の論考「慶長十一年十一月十一日の光悦色紙」が添えられています。図版もベルリンの色紙全36葉を含め63点を口絵とした豪華版です。

今回、秋の特別展「角倉素庵」を開催するにあたり、改めてこの号を精読し、感ずるところ多々ありました。以下その一部をご紹介します。

林屋辰三郎の論文「光悦と素庵」は、光悦と素庵の出会いを慶長元年以降、とりわけ関ヶ原の合戦前後と推論し、「二人の持ち味」と題する第2章では、光悦を王朝文化の伝統を受け継ぎ、新たな院政の古典復興を身をもって具現した芸術家であり、一方、素庵は父了以に勝るとも劣らず経営手腕を発揮した実業家でありながら、論語や漢詩文に通暁した学者でもあると紹介しています。

そして第3章では、このいわば和魂と漢才が合いまみえて興した共同事業こそがいわゆる嵯峨本の刊行であるとし、続いて「楳円の交友圏」と題する第4章と最終章「平和へのかけはし」において、この共同作業が単なる文化サロンではなく、禁裏と幕府を両睨みした、勝れて生産的な行動であり、東福門院徳川和子の「菊と葵」を底辺で支える文化活動であったと結論づけています。

この桃山・江戸初期の文化動向を、光悦の書そのものから浮き彫りにしたのが、小松茂美の論考「光悦と光悦流の書」です。氏は光悦の書をA慶長期とB寛永期に分けるとし、前者の豊潤な筆致に

暢びやかで自由闊達な桃山の時代精神を、太細が露骨化し筆先の尖った後者の書風に、萎縮し固定化した寛永期の社会風土を読みとります。そして嵯峨本完成の背後に、「光悦流」の字かき職人—あるいは芸術家と呼ぶべきか（原文のまま）—と「宗達様」の下絵かきを擁した工房の存在を想定しています。

この「宗達様」の下絵かき、ひいては宗達自身の芸術に鋭く迫ったのが山根論文「光悦色紙の下絵について」です。世に光悦色紙と称する作品は8件あって（当時）A、B、C、Dの四群に分けられ、Aは宗達自身の作、Bは優れた弟子甲の手、Cはもう一人の弟子乙、そしてDをその他に分類しようと結論づけています。

その精緻極まりない様式分析は、12年後に発表された論文「宗達金銀泥絵の成立と展開」（『光悦書宗達金銀泥絵』所載、『山根有三著作集 一』再録）において、色紙だけでなく扇面や和歌巻にも及び、畠山記念館蔵の「四季花卉下絵古今集和歌巻」で光悦の書と宗達の下絵が虚々実々に競演する様を、さらに諸家分蔵の「蓮下絵百一首和歌巻」の金銀泥下絵に、宗達が寛永年間に手掛ける大画面金障屏画への転換点を見い出します。

そしてこの光悦との競作が宗達の画風展開に大きな刺激を与えた



ベルリン国立東洋美術館蔵 金銀泥下絵新古今集色紙

とする一方、特に元和年間以降、宗達は弟子たちが宗達風に描くことには寛容であり、それだけに現代の我々は宗達研究に際し作品比定には厳しく対処しなければならないと説きます。

例えば暈しの一種である「たらし込み」の技法は、描写対象を面の拡がりとして捉えるために宗達が編み出した技法であって、これを単なる技として宗達の登録商標の如く用いるのは、追隨者（ひいては我々）の本末転倒した所業にすぎない、と山根論文は厳しく指摘します。ある作品の作者を同定するには、技法や様式的一致という必要条件を整えるのはもちろんのこと、その作品を当該作家の作風展開の図式の中に然るべく、新たな発見の驚きと感慨をもって組み込むことができる、という十分条件も満たす必要がある。山根論文は強くそう訴えているように思われてなりません。

長く大和文華館の顧問も務められた山根有三先生が亡くなられて早や一年。今回の特別展「角倉素庵」について、暖くも厳しい先生の評言を、もはや我々はいたたくことができませぬ。

季刊 美のたより No.140

平成14年10月5日

発行 大和文華館